

〈翻訳〉

## モーリス・アルヴァックス 『聖地における福音書の伝説地誌』 第9章 結論 (1)

横山寿世理\*・金瑛\*\*・柳田洋夫\*\*\*

### 抄 録

---

M. アルヴァックス (Maurice Halbwachs) による『聖地における福音書の伝説地誌』 (*La topographie légendaire des évangiles en Terre sainte*) の結論を分割して訳出する。序論はすでに『聖学院大学論叢』34(1)に掲載済みであり、今後も残りの結論部分を順に邦訳していく予定である。

結論の冒頭部では、ルナンによるエルサレムの地誌などに照らしながら、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネによる福音書から、集合的記憶が再構成されようとしていると解釈できる。また、アルヴァックスは、イエスの言行や弟子たちとの集いもたれた場所が、後世の人びとに特定されることを取り上げており、ここに集合的記憶が明らかになると考えられる。

---

キーワード：アルヴァックス，集合的記憶，聖地，福音書，伝説地誌

ここまでの議論では、4世紀以前のキリスト教的な〔出来事のあった〕場所の特定〔localisations〕について、いくつかの仮説を立てただけである。このことが悔やまれるのは、後の時代に再発見される多くの記憶が、この時代において形づくられ、維持されていたかもしれないからである。2世紀にパレスチナを訪れたであろう巡礼者の物語は、私たちに何を伝えていないのだろうか。そこでまず、その時代の人々が想起しえたことを推測して想像してみよう。また、場所に関するキリスト教の初期の記憶〔la première mémoire chrétienne des lieux〕がどのようなものだったのかも、推測して想像してみよう。いずれにせよ、新約聖書の文書と福音書、そしてそれらに続く口承が存在している以上、あらゆる情報が欠けていることにはならない。あのポルドーの巡礼者はそれら〔新約聖書の文書と福音書、口承〕を読んでいたし、彼を導き教えた人々もそれらを知っていた。だとすると、それらは最初の備忘録〔aide-mémoire, 記憶を助けるもの〕、すなわち、場所の特定〔localisation〕の初期の試みに影響を与えるものだったのだろうか。

---

\*人文学部・日本文化学科

論文受理日 2022年7月1日

\*\*関西大学・社会学部

\*\*\*人文学部・日本文化学科／児童学科

福音書はまさに、念入りに作り上げられてきた集合的な成果であるが、その一部は一般民衆にも広がった。このことは、福音書の中に相違点と類似点が同居しているのに起因していると思われる。たとえば、「ヨハネによる福音書」がゲツセマネ〔イエスが捕らえられる直前に苦しみもだえながら祈りを献げた場所〕については語らず、イエスの苦しみを別の場所〔endroit〕に配置していることが注目されてきた。ヨハネはベツレヘムについては話していない。だが〔マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの中で〕彼だけが、カイアファのしゅうとであったアンナスのところにイエスがまず連れて行かれた<sup>(1)</sup>と述べ<sup>(1)</sup>、ラザロの復活について語っている。だが反対に、イエスが「これは私の体である」云々と告げて聖餐を初めて行ったことについて、ヨハネは何も述べていない。「ルカによる福音書」では、ファリサイ派の人の家でイエスの足に香油を注いだのは女の罪人である。「ヨハネによる福音書」では、ベタニアのラザロの家で香油を注いだのはマリアである。また、「マルコによる福音書」と「マタイによる福音書」では、香油を注いだのは一人の女であり<sup>(2)</sup>、場所はシモンの家においてである。〔さらに、イエスの復活に関して、〕「マタイによる福音書」では、イエスの死の後で、イエスはガリラヤの山の上で、たった一度だけ11人の弟子の前に現れる。「マルコによる福音書」と「ヨハネによる福音書」では、イエスが初めてマグダラのマリアの前に現れたのは、墓の近くにおいてである<sup>(3)</sup>。「ルカによる福音書」と「ヨハネによる福音書」では、最初に11人の前にイエスが現れるのは、エルサレムにおいてである。「ヨハネによる福音書」においてのみ、イエスは二度現れ、その場所は二度目もエルサレムである。「ヨハネによる福音書」だけが、一度目の後にイエスをもう一度現れさせており、さらにその場所はティベリアヌス湖畔である（「マタイによる福音書」とは違い、ガリラヤ地方の山の上ではない）。エマオに復活したイエスが顕現したことは、「マルコによる福音書」と「ルカによる福音書」にのみ記されている。そして「ルカによる福音書」だけが、ベタニアでのイエスの昇天を記している。細部がいくらか異なる解釈が数多く存在していたが、それらは互いに多く〔の記述〕を取り入れていたに違いない<sup>(4)</sup>。しかしながら、場所に関しての一致は通例である。四つの福音書から引き出されるのは、類似した一般的な枠組みである。（特に「ヨハネによる福音書」においては、他の福音書との違いが際立っているため）語り口に関してそうした枠組みが引き出せないにしても、少なくとも場所や出来事、意味合いについては、そうなのである。したがって、この一般的な枠組みはすでに、一つの集団に共有された一つの記憶であるか、複数の記憶の集まり〔ensemble〕である。

出来事と、（その記憶が書かれるより前に）それが最初に集合的な形態をとる瞬間との間にはわずかな時間しか流れていないのだから、出来事の記憶に持ち込まれる歪曲や間違い、忘却は最小限であると予想できる、などと考えるはならない。反対に、様相を変更してしまう危険性が最も高まり、その特徴を定着させておくことが最も難しいのは、記憶に留められ報告されるに値する事実が生じた直後であり、直接的な証言が依然として存在している時だということを、たびたび主張するのはまったく逆説的ではない。とりわけこの出来事が、人間集団〔の心〕を活発に動かし、白熱す

る議論の糧になりうる状態の時には、上記のことが当てはまる。

事実の前、そしてとりわけ事実の後に、証言者たちが集団の一員として、集団の信念や欲望に従って事実を再構成しようとする時、これら証言者たちの陳述や、さらには印象さえもが有する価値とはいかなるものであろうか。自分が目撃したことを語る時、自らの共同体にとって重要ではないと思われる細部を、これらの証言者は捨てておいてしまっただろう。おそらく、目撃したことの細部が彼らから失われていくのは、まさにこうした理由からであろう。彼らがどれほど素直で従順であろうと、敵対的もしくは無関心であるより大きな社会の中で、彼らは自分たちが形成する小集団と現実との接点であり続けている。だが、動揺し目がくらみ、我を忘れた彼らが、十分に見るため、そしてすべてを見るために必要な平静さを保つことなどあり得るだろうか。彼らの言葉遣いは、まったく情緒的で、曖昧で混乱したものだというのに。

実際には、あらゆる証言は、次のような相矛盾する条件を満たしているに違いない。すなわち、証言者が目に見える事実を観察する時には集団から離れているのに、証言者がそれらの事実を想起するためには集団の中に戻っているという矛盾した条件である。証言者は、次々に、またほとんど同時に、その社会の一員としてのあり方を捨て去り、身につけ直さなければならないのだ。

イエスが捕らえられた時、弟子たち全員が逃げ出し、散り散りになった。遠くにあってもイエスとともにあったのはペトロだけだった。この時、キリスト教徒の集団はペトロ一人に完全に集約されていると言えよう。けれども、ペトロは同時に、キリスト教徒の集団から一時的に離れているということにもなるだろう。ペトロに課されているイメージは、弟子たちの考え方とはまったく正反対の意外なもの、暴力的なものであった。そして、[ペトロが] 弟子たちの集団に留まっていたこの時期において、弟子たちはこれらのイメージを認めることも理解することもできなかったであろう。自分がイエスの弟子であることを当時のペトロが忘れていたことは自然なことである。こうした条件 [イエスの弟子であることを忘れること] においてのみ、何らかの直観 [vision] で満たされた幻覚に取り憑かれて自分の目と耳を閉ざすような弟子とは異なり、ペトロは聴衆たちと同じように見て理解することができ、キリストの背後そしてその向こうに、超自然的で超感覚的な存在の世界を見つけるだろう。

こうしたことが、ペトロによる裏切り [イエスに予言されたとおりにイエスの弟子ではないと証言したこと] に対して与える意味である。ペトロはイエスを裏切って証言者となったが、それは、混乱やひどい小心によるものではなかった。彼は、裏切ることによって、動揺や苦悩や憤慨（それらは追跡を逃れるために抑圧しなければならなかったものである）に感覚を曇らされることなく、また、アンナスやカイアファの邸宅で話されたりなされたりしたことについて記憶に刻むことを妨げられずに、[イエスのことを] 見て理解することができたのである。キリストがユダヤ教徒たちの手に落ちたそのときから、もはや、弟子たちは彼の声を聞くことができなくなった。けれども、キリストの発した言葉と、最高法院の前でのイエスの態度は、福音書に描かれることになる。

ペトロの証言がそのまま福音書の中に書き写されたのだろうか。そうではなく、弟子たちがペトロに伝えてもらいたいと期待していたことだけを、再び弟子となるペトロは見聞きしたと信じていたのであろう。〔ペトロ以外の〕別のキリスト教徒の証言者たちが存在したのだろうか。「ヨハネによる福音書」18章15節においてのみ、大祭司の知り合いであったもう一人の弟子も大祭司の屋敷に入り、イエスに続いたとある。いずれにせよ、その物語は福音書どうして異なっている。別のテキストではピラトの前でイエスが言ったことが、カイアファの前でイエスについて人々が言ったということにされている。ペトロは、自分が隠れていた片隅でイエスの言葉を聞くことができたのだろうか。彼はおそらく、人々がイエスに課したひどい仕打ちを、ずっと窺っていただけであろう。しばらく後で、キリストが以前言っていたことと、その日に言ったこととの混同が、ペトロの心の中で生じたと考えられる。また、いずれにせよ、他の弟子たちの心の中でもこのような混同が生じたがゆえに、ペトロの物語が修正されたと考えられる。したがって、ペトロ自身の物語と、そこに他の弟子たちが持ち込んだものとを区別することは、やがて不可能になってしまったと考えられる<sup>(2)</sup>。

イエスの生とその死をめぐる状況について、弟子たちが守り続けなければならなかった記憶の一部分しか、福音書は再現していない。いずれにせよ、それらの記憶はまさに、キリスト教徒集団の集合的記憶〔*mémoire collective*〕の中に留まっているものの本質である。出来事から隔たるにつれて、キリスト教徒集団は、自らが守ることを目指したイメージを明確化し、手直しし、補完しなければならなかった。したがって、自らの知覚したことを確かめるために、人間は普通対象に近づく必要があるのに対して、集合的な記憶〔*souvenir collectif*〕を保持するためには、対象から離れなければならないように思われる。

最初のうちはイエスの死後の数年間、そして〔その後には〕1世紀の大半の間というきわめて長い時間、この光景〔イエスの死〕の特徴を保存し定着させることには、まったく関心が払われてこなかったのかもしれない。というのも、諸々の出来事は相変わらず、〔人々にとって〕きわめて馴染みのあるものだったからである。むしろ人々が考えていたのは、世界の終わりが差し迫っているということだった。いずれにせよ、キリスト教の伝承が最初の弟子たちによって直ちに定着されたのだとしても、イエスの晩年の出来事は、〔伝承に〕編成されるはずだった他のものの中心にはならないと考えられたのかもしれない。あるいは、関心の主要かつほぼ唯一の対象——イエスの晩年の出来事とは密接に結びつかないものすべてを徐々に日陰に追いやるようになるような対象——にもならないと考えられたのかもしれない。

というよりはむしろ、キリストの同伴者たちは、キリストの非業の死を予見不可能な出来事として考えていたはずである。なぜなら、キリストの死は、同伴者たちが慣れ親しんでいたキリストの姿にいくつかの特徴を付け加えはしたが、それを深く変容することはなかったからである。普通法によって自身が犯罪者と混同されるようになったこれらの悲惨で予想外の場面を強調する代わり

に、キリストがユダヤ人民の世論のレベルにまで降りていったかどうかを知る人などいない。まだカルヴァリの丘〔イエスが十字架につけられた丘、Calvaire〕の影には覆われていない、さらに遠くの時や空間においても、最後の日々や数週間における様々な出来事に彼らの思考が向かっていなかったのかどうかを知る人などいない。

ガリラヤ、ゲネサレト湖畔〔キリストのガリラヤ伝道の拠点となったガリラヤ湖北西岸の平原のこと、lac de Génésareth〕は、キリストが好んだ滞在地、活動の枠組み〔le cadre de son activité〕であり、キリストの人生の多くの年月はここで繰り広げられた。彼が同伴者たちに出会い、選び、自らのもとの集めたのは、このガリラヤの地においてである。エルサレムでは彼はよそ者であったため、窮屈な思いをしていた。宗教上の義務や自らに課された伝道という使命を彼が果たすためには、周囲の状況に従う他なかった。だからこそ、彼は城壁の内部に住まうことはなく、ベタニアのオリーブ山の斜面にある友人や弟子たちのところで暮らした。最高法院の法廷、ピラトの法廷、犯罪者たちの処刑場——同伴者たちは同行しておらず<sup>(3)</sup>、そこでキリストを見たこともない——よりもむしろ、他の場所、たとえばキリストに出会った〔ゲネサレト〕湖畔や、キリストを見送った村々のことを、同伴者たちは思い浮かべていたはずである。その当時、キリストは自由に移動して、同時代の他の宗派の首領たちと同様に宣教活動を続けていたが、キリストも弟子たちも無法者とは見なされなかった。

これらの詳細が書き留められ適切に配置されている描写はおそらく、後に現れて「〔キリストの〕受難」に〔関心を〕集中させている伝承よりもいっそう、記憶自体〔le souvenir d'ensemble〕と一致しているであろう。あるいは、キリストから弟子たちの記憶〔mémoire〕の中に残っている記憶の全体〔l'ensemble des souvenirs〕と一致しているであろう。それゆえ、〔キリストについての〕伝承が現れてくるのはもっと後になってからであり、その伝承は「キリストの受難」に集中しているのだ。結局のところ、最高法院からカルヴァリの丘（すなわち〔キリストの磔刑が〕実施された場所）へとキリストを連れて行くことになる道へと、（本人の意思はどうあれ）キリストが巻き込まれてすぐに、キリストは弟子たちのもとを離れた。キリストが人々の師であった間は、彼の言行についての説明を、人々はキリストに求めていた。しかし、キリストが弟子たちのもとを離れる際には、彼の行いや発言は公法と刑法によって規定されるようになった。他ならぬキリストの姿が、多くの他の布教者や扇動者たちの姿と同一視されていたのは、彼らが結局のところ、キリストと同じ苦難を経験し、同じ責め苦を受け続けている人たちだったからである。キリストが監獄に入れられ、悪評による不名誉や公開裁判を経て不名誉な刑を執行される前には、キリストと弟子たちの距離はきわめて近いものであり、弟子たちもキリストと深く結びついていたというのに！

確かに、福音書は私たちにまったく別の印象を与えがちである。それは、キリストの全生涯が死への助走に過ぎないかのような印象、キリストが前もって弟子たちに自らの死を告げていたかのような印象である。しかし、キリストを理解して、キリストの傍らで生き、福音書の物語の構成要素

となり、さらに後に福音書に蒐集されることになった伝承に練り上げていったのは、おそらく弟子たちの集団ではない。これらのことを成し遂げたのは〔キリストの死後に〕拡大したキリスト教の共同体であり、この共同体はキリストを〔直接は〕知らなかったのである。キリスト教の共同体がキリストの生涯を死への助走として解釈したのは、われわれが知らない理由や影響のためである。また、キリストの死が復活の条件に他ならない以上、キリスト教の共同体は、キリストの死の中に、超自然的な出来事を見て取ったのである。しかしながら、生きているイエスのことしか知らず、その大部分はイエスの死にも立ち会わず、イエスの復活を確かめることすら認められていなかったような人々の証言が、いったいどれほど重要なものかと言えるのだろうか。その点について、パウロはイエスに会ったことはないのだが、使徒たちのあらゆる証言そのものよりも、自らが見たもの〔*sa vision*〕<sup>[6]</sup>に重要性を認めることになる。パウロは、少なくとも自分が他の使徒たちと同列だと思っていたからである。

少なくとも、これらの証言が重要となり、記憶に留められる余地があるのは、拡大されたキリスト教共同体がずっと後になってやっと認識し理解したことに依拠して、これらの証言が補完され新しい意味を受け取る範囲においてのみである。弟子たちの集団がもとのままの完全な形では存在しなくなってしまった以上、かつての集合的記憶〔*mémoire collective*〕の断片である個人的記憶〔*mémoires individuelles*〕は、これ以降は何の支えも持たなくなった。これらの個人的記憶は、あまりにも不安定で漠然としていた。弟子たちの離散およびエルサレムの崩壊の結果、これらの個人的記憶はやがて、新しい解釈に対して紛れもない物質的な痕跡を対比させることができなくなってしまった。ここまで述べたことはすべて、これらの事実は何らかの現実味があるという仮定上のものである。

弟子たちだけが特定できた場所〔*lieux*〕というのは、そこでイエスとともに集い、イエスに出会い、他の教団の長たちと同じようにイエスが語り、奇跡を行った場所である。これらのあらゆる出来事は、当時の一般的で日常的な生活の一部であった。またおそらく、キリストの生涯を弟子たちが自分の目の前に喚起して欲しいと思っていた人々に対して、これらの出来事は様々な場所〔*endroits*〕を提示したが、それらの場所は何の伝承にも結びついていないがゆえに、知られておらず、特定することもできないような場所であった。特筆すべきなのは、エルサレムで目にされる聖なる場所〔*lieux saints*〕すべては、宗教的な特徴を持ついくつかの例外的・超自然的な出来事と結びついているということだ。たとえば、ゲツセマネ（ルカによる福音書では、「天使が天からイエスのところに現れて、イエスを力づけた」場所、「汗が血の滴のように彼の上で広がった」場所、22:43-44）<sup>[7]</sup>、イエスが復活した聖墓、イエスが昇天したオリーブ山、イエスの死後に使徒たちの前にイエスが現れた主の晩餐、キリストの変容の場所などがある。信徒たちがこれらの場所を訪れるのは、イエスの死、エルサレムの破壊と復興、長い期間の離散から長い時間が経ってから、キリスト教共同体が改革され、拡大されたときである。人々が共に記憶している〔*commémorer*〕<sup>[8]</sup>のは、

超自然的なキリストである。弟子たちがキリストを再発見し想起し直したのは、これらの場所においてのみだというのは、確かなことなのだろうか。そこで起きたことすべてについて最も信頼できる最良の目撃者は、その弟子たちなのだろうか。問題となるのは、もはや適切に知ることができなくなってしまった事実である。とりわけ問題となるのは、特定の事実についての超自然的な意味〔signification〕である。空になった聖墓をはじめに見た者は、弟子たちの中には一人もいなかった。一人ないし複数の天使が復活を知らせた相手は、弟子たちではなかったのだ。キリストは何人かの弟子の前にだけ姿を現した。キリストの死後に起きたこれらの超自然的な出来事について、弟子たちの間には多くの疑念と反論があったに違いないと推察される。したがって、彼らの証言は、彼らの時代や後に展開し続けたこれらの事実に関する信念を十分に弱めることも、強めることもしなかった。

したがって、聖なる場所〔lieux sacrés〕が記念しているのは、当時の証言者たちによって保証された事実ではなく、おそらくはこれらの場所からそう遠くないところで生まれ、そこに根付くことで強化されてきた信仰〔croyances〕である。たいていの場合、このような信仰は、超自然的な秩序に基づく事実を対象としていて、キリスト教の本質的な教義はいずれもこれらの事実に立脚している。弟子たちが知ることのできたイエスの生死に関する初期の話において、いくつかの出来事が記憶に留められて際立たせられ、そしてそれらの出来事が生じた場所だけが示されている。そうなった理由はまさしく、人々が証言よりも教義に依拠していたからだと思われる。人となった神が人間の罪のために死んで、永遠の生をもって復活することになったことを確認するとすぐに、1世紀終わりもしくは2世紀のキリスト教徒たちは、他のあらゆる場所を探そうとするよりも前に、イエスが裁かれた場所、十字架にかけられた場所、埋葬され復活した場所、弟子たちの前に姿を現した場所を探そうとしたのは確かである。自分の人生の特定の時期を生き直し、消えてしまった細部の多くを見出すために、人はその時期を過ごした場所へと戻る。それと同じく、場所に触れることによって、その当時保持された記憶——弟子たちから口伝えされたであろう記憶——を蘇らせて、呼び覚ますことが問題となっているのだろうか。信徒たちにとっては、まったく別のことが問題であった。効果的な力に絶えず恵まれている超自然的な場所、すなわち、信仰〔foi〕を強め、教義に力を与え、〔その姿を〕描き説明するのに打ってつけの場所に赴くのと同じように、人々はカルバリや聖墓へと赴いたのである。

確かに、後に教義へと移し変えられた事実が起こったまさにその場所を、信者が見たり触れたりすることが保証されているかどうかは、どうでもよいことではない。諸集団による記憶作用〔la mémoire des groupes〕は、多くの真理、概念、観念、一般的命題を記憶に留める。そして、宗教集団による記憶作用が保存するのは、当初は露わなものであった教義の真理、もしくは、次世代の信者や聖職者が定着し定式化する教義の真理についての記憶〔souvenir〕である。しかし、ある集団の記憶作用によって真理が定着するためには、出来事や人物像、あるいは場所といった具体的な

形で真理が現れなければならない。

実際、純粋に抽象的な真理は記憶 [souvenir] ではない。というのは、記憶は私たちを過去へと遡らせるからだ。反対に、抽象的な真理には、一連の出来事との間の係留地が欠けている。なぜなら、一連の出来事には願望や熱望が混ざり合っているからだ。信者たちが負うべきだが自身が引き受けた罪を償うために死んだ神についてのより正確な観念と同じく、贖罪の観念というものは抽象的な観念、宙づりの象徴に過ぎない。贖罪の観念は〔西洋では〕1世紀に生まれ、東洋ではもっと早くに生まれていたが、どの場所にもうまく根を下ろせず、特定の時代に結びつくこともなかった。そのため贖罪の観念は、それについて何の記憶 [souvenir] も残せないおそれがあった。他方で、1世紀が三分の一ほど過ぎたあたりで、おそらくガリラヤのユダヤ人集団は、十分に生き活きとした記憶を保持していた。それは、彼らの師であり仲間でもあった誰か〔イエス〕、彼の教えや旅、他のユダヤ人たちとイエスが行った議論、そして、イエスの非業の死の前と後の状況などについての記憶であった。これらの記憶は弟子たちの姿や、イエスが生きていた時代のガリラヤやユダヤ地方、エルサレムの様子と密に結びついたままであった。弟子たちがいなくなり、イエスと面識のあった人たち全員がいなくなった場合や、イエスが頻繁に通った家々が廃屋となりかけたり立て替えられようとした場合、破壊や再建によって町の様子が変わってしまった場合、そして、イエスの軌跡を辿り、その姿や振る舞いや声の抑揚を想起するために、かつて〔イエスが〕親しんだ多くの場所に赴く人など誰もいない場合に、果たして何が残っているだろうか。

## 付記

本翻訳は Halbwachs, Maurice, *La topographie légendaire des évangiles en Terre sainte: Étude de mémoire collective*, PUF, 1941 を底本とした。凡例については序論 (『聖学院大学論叢』34 (1) 2021) を参照されたい。また、参考文献からの引用については、原典の表記を踏襲して、本文とは統一しない。聖書の各巻の略語は新共同訳に従う。また、投稿に際して、今回も関西学院大学の松本隆志氏には邦訳原稿を確認していただいた。

## 原註

- (1) ルナンはこう述べている。「『ヨハネの福音書』にだけ見られるこうした状況は、この福音史家が細部にまで入念であったことの最も強力な証拠である」(*Vie de Jésus*, début du chap. XIX, en note.)。
- (2) ルナンは以下のように述べている。「最高法院はカイアファの所で招集された。審問が始まった。多くの証言者が出頭し、運命の言葉が実際に発せられた。すなわち、『私は神の神殿を破壊し、3日でそれを再建します』<sup>(5)</sup>という言葉が、二人の証言者によって引用された。ユダヤ人の律法に従えば、神の神殿を冒瀆することは、神自体を冒瀆することである。イエスは沈黙を守り、糾弾された発言について説明することを拒んだ。物語 (マコ 14:62) を信じなければならないとすれば、大祭司はイエスに命を命じ、自分がメシアであるかどうかを言わせたのだろう。また、イエスはそう告白し、彼の黙示録的な世界 [son règne apocalyptique] の到来が間近であると、会衆の前で宣言したのだろう。[死を決意していたイエスには、その勇気ゆえに、そのように告白する必要はなかった] (写本への追加)。ここでより可能性が高いのは、ハナン [家のアンナス] のところでそうしたように、



イエスが沈黙を守ったということである」(chap. XIX, ALFARIC, *Les manuscrits de la «Vie de Jésus»*, p. 293.)。

- (3) 「その部隊は、田舎から戻ってきたキレネのシモンなる者と出くわした。ローマの兵士たちは、恥ずべき木〔十字架〕を自分自身で担ぐわけにはいかなかったため、その死に至る木をシモンに担がせた。外国による占領というお決まりのやり方によるか、広く認められた雑役の権利を活用することで、兵士たちはシモンにそうさせたのであろう。シモンはすでに、あるいは後になって、キリスト教の共同体に所属していた。彼の二人の息子〔アレクサンドロとルフォス(マコ 15:21)〕は、そこでは特に有名であった。シモンが息子たちにイエスの死の状況を詳しく話したのであろう。その時、イエスのそばには一人も弟子がいなかった」。また、まさに磔刑の時には、「キリストの弟子たちは逃げ出してしまっていた。しかしながらヨハネは、そこに留まって十字架の下を離れなかったと主張している」。実際、ルナンは次のように付け加えている。「エルサレムまでキリストに随行し、彼の世話をし続けたガリラヤ出身の女たちや忠実な友たちが、キリストを見捨ててはいないことは、より確かなことである。クロパの妻マリア、マグダラのマリア、ジャンヌ、チュザの妻、サロメ、さらに他の者たちは、距離をとったまま、キリストから目を離さなかった」(*Vie de Jésus*, chap. XX. Selon Matthieu, Marc et Jean.)。ルカだけが次のように述べている。「また、イエスを知っているすべての人たちと、ガリラヤでイエスに随行していた女たちもそこにいて、起きていることを遠くから眺めていた」{(ルカ 23:49)}。

## 訳註

- [1] 関連する記述として、聖書には「そこで一隊の兵士と千人隊長、およびユダヤ人の下役たちは、イエスを捕らえて縛り、まず、アンナスのところへ連れて行った。彼が、その年の大祭司カイアフアのしゅうとだったからである」(ヨハ 18:12-13)、とある。(横山)
- [2] ルカ・ヨハネ・マルコ・マタイそれぞれの福音書における「ベタニアで香油を注がれる」記述は次のとおりである。ルカによる福音書では、「この町には一人の罪深い女がいた。イエスがファリサイ派の人の家に入って食事の席についておられるのを知り、香油の入った石膏の壺を持って来て、後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足に接吻して香油を塗った。イエスを招待したファリサイ派の人はこれを見て、『この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに』と思った」(ルカ 7:37-39)とあり、アルヴァックスによる指摘を裏付けることができる。また、ヨハネによる福音書では、「そのとき、マリアが純粹で非常に高価なナルドの香油を1リトラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった」(ヨハ 12:3)とある。
- これに対して、マルコによる福音書では、「イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家において、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粹で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた」(マコ 14:3)とある。マタイにおける福音書では、「さて、イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家におられたとき、一人の女が、極めて高価な香油の入った石膏の壺を持って近寄り、食事の席に着いておられるイエスの頭に香油を注ぎかけた」(マタ 26:6-7)とある。ルカ・ヨハネによる福音書にはシモンの家についての記載がないことがわかる。(横山)
- [3] アルヴァックスの記述通りに、マグダラのマリアの前にイエスが現れたことについては、聖書(マタ 28:1-9)(ヨハ 20:11-14)において確認できる。ただし、聖書(マコ 16:9-11)においてもマグダラのマリアたちの前にイエスは現れているが、墓の近くかどうかについての記述は見当たらない。詳細な差異はあっても、「場所に関しての一致」であり、「類似した一般的な枠組み」を認められるという例示なのかもしれない。(横山)
- [4] 新約聖書の成立について補足すると、マタイ・マルコ・ルカのいわゆる共観福音書のうち、マ

ルコが最も古く紀元70年代に成立したと考えられている。マタイとルカは、マルコそして「Q資料」と呼ばれるイエス語録にもとづきつつ、それぞれさらなる独自の資料（マタイは「M資料」、ルカは「L資料」）を加えて80年代に成立したと見られている（マルコ・Q資料・M資料・L資料の「四資料説」）。また、それらの資料は、それまでに受け継がれてきた様々な口伝を文書化したものでもある。ヨハネ福音書は、共観福音書とはかなり異なる内容ゆえに、区別して「第四福音書」と呼ばれることがある。ヨハネは、マルコと同じ起源を持ちながらも異なる経路で伝承された「しるし資料」（イエスの奇跡物語を集めたもの）などをもとに独自に記され、90年代に成立したものと考えられている。（柳田）

[5] 聖書では「わたしは人間の手で造ったこの神殿を打ち倒し、三日あれば、手で造らない別の神殿を建ててみせる」（マコ14:58）とある。（柳田）

[6] 「徒使言行録」9章に次のように記されている、パウロが復活のキリストに出会った（正確にはキリストの声に撃たれた）ことを指すものだろう。（柳田）

サウロ〔パウロ〕が旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、私を迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。……「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。……」（使9:3-5）

[7] 実際の聖書には、「天使が天から現れて、イエスを力づけた。イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に天に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた」（ルカ22:43-44）とあり、アルヴァックスの引用とは叙述が若干異なる。（横山）

[8] フランス語の *commémorer* は日常語の文脈では「記念する」「追悼する」というニュアンスがあり、記念式典や追悼行事における「記念顕彰」の意味でも使用される用語である。（金）

#### 参考文献

『聖書（新共同訳）』日本聖書協会 1987/1988年。

Aland, Kurt, *Synopsis of the Four Gospels*, Division of Christian Education of the National Council of Churches of Christ in the United States of America, 1971. (クルト・アーラント監修 荒井献・川島貞雄・他訳『四福音書対観表』日本基督教団出版局 2000)

Renan, Ernest, *Vie de Jésus*, Michel Lévy Frères, 1870. (E. ルナン著 忽那錦吾・上村くにご訳『イエスの生涯』人文書院 2000)

Maurice Halbwachs, “Chapter 9, Conclusion” (1),  
*The Legendary Topography of the Gospels in the Holy Land*

Suzeri YOKOYAMA, Ei KIN, Hiroo YANAGIDA

---

Abstract

We translated the first part of the conclusion of *The Legendary Geography of the Gospels in the Holy Land* (*La Topographie légendaire des évangiles en Terre sainte*) by Maurice Halbwachs. The introduction has already been published in the *Journal of Seigakuin University*, Vol. 34, No. 1, and we will continue to translate the remaining concluding sections into Japanese in sequence.

The opening section of the conclusion can be interpreted as an attempt to reconstruct the collective memory from the Gospels of Matthew, Mark, Luke, and John considering the geography of Jerusalem as described by Renan and other sources. Halbwachs also discusses how later generations identified the places where Jesus spoke, performed deeds, and met with his disciples, and it is here that collective memory is likely to be revealed.

---

**Key words:** Maurice Halbwachs, Collective Memory, Holy Land, Gospels, Legendary Topography

Maurice Halbwachs, le «Chapitre 9; Conclusion» (1),  
*La topographie légendaire des évangiles en Terre sainte*

Suzeri YOKOYAMA, Ei KIN, Hiroo YANAGIDA

Abstrait

---

Nous traduirons la première partie de la «Conclusion» de *La topographie légendaire des évangiles en Terre sainte* par M. Halbwachs. L'«Introduction» a déjà été publiée dans *Le journal de seigakuin université*, vol. 34, n°1, et nous continuerons à traduire les autres conclusions dans l'ordre en japonais.

Cette partie de la conclusion peut être interprétée comme une tentative de reconstruction de la mémoire collective à partir des évangiles de Matthieu, Marc, Luc et Jean à la lumière de la géographie de Jérusalem de Renan et d'autres sources. Halbwachs aborde également l'identification par les générations ultérieures des lieux où Jésus a dit et fait des choses et où il a rencontré ses disciples, et c'est là que la mémoire collective a la possibilité de se révéler.

---

**Mots-clés:** Maurice Halbwachs, mémoire collective, Terre sainte, évangiles, topographie légendaire